Kierkegaard の匿名表現から Hawthorne の寓意表現へ溯る

——"The Great Stone Face" 論——

鵜 木 奎 治 郎

I

現在我々が当面している社会は所謂情報によって規制されている日本の社会である。特に知的情報を装う情報によって規制されている日本の社会である。中でも所謂知的情報提供に最も貢献している新聞は，特定の政党直結の新聞は別として，何れも不偏不党中立の立場を代表することになっており，民衆の世論を最も誠実に代弁する物であるということになっている。その為の一つの手段として民衆の声を代弁する投書欄を設けている。ところで今ここで日本を代表する二大新聞の投書欄の規定を再確認してみよう。全く同じ「投稿される方へ」という見出しの下で，A新聞は「匿名は不採用」と謳っており，M新聞は「匿名希望者は理由を付記」と謳っている。他にも若干の相異点を指摘しうるが，「他紙との二重投稿はお断わり」と但書で拘束している表現はその文章迄同一である。明かに両紙共投稿者の発言に対して，その倫理的責任を問うているのであるが，肝心の新聞自体の倫理的責任はどうなっているのであろうか。匿名という投稿者のあり方について両紙とも警戒心を抱いているということは紛れもない事実であるが，肝心の新聞自体の不偏不党という立場も一種の匿名ではなかろうか。事実社説には執筆者の署名は無い。執筆者自体はA紙，又はM紙という権威の庇護の下に匿名の権利を行使しているのである。然もその新聞の社説自体が，断定を避けた所謂中立の立場をとる場合が無いわけでもない。大衆の世論が両極端に別れる様な問題が生ずると，相反する立場をとる投稿が併記されることもあって，一体新聞社自体はどちらの投稿に与しているのだろうかと迷わされる。そしてその結果，「この種の投稿は之で打切る」とか，或いは一括して「投書を追うて」（A紙）と統計的に処理されることになる。こうなると所謂世論を代弁している筈の新聞も，単に世論を代弁しているという形式だけに終始して，実は逆に世論を形成している役割すら果たしている場合もあるのではないかと疑われてくる。要約すると，新聞の意見と所謂世論の構造は循環的でありながら，新聞は事実上匿名の立場を行使し，投稿者は匿名の権利を行使することに制約が課せられているのである。そしてマスコミの言う大衆とは平均化された大衆の一員であるということに他ならない。

II

所謂大衆の世論乃至マスコミという曖昧で然も互大な力に対決し，自己の到達した思想の発表の手段として煩瑣にすぎる程匿名の手段を行使した人物ということになると直ちに略一

世紀前の Kierkegaard の名が浮かぶ。彼は主要著作を殆ど凡て匿名の形式で公表した。彼は出版社が偶然発見した無名の人物に発表の機会を与えたにすぎないという形式をとり，然も時には一つの著作の中で更に複数の匿名を使用するという手のこんだ方法すら採用している。『反復』（Gjentagelsen）では２人，『あれか――これか』（Enten-Eller）では５人，『人生行路の諸段階』（Stadier paa Livets Vej）では実に10名に亘る匿名の人物が発表したという形式をとっているのである。何故彼が此の様な方法を採用したのだろうか。彼は実に「匿名の諸著の中には，私自身の言葉はただの一つもない。だから，もし誰かがこれらの著書から個々の言葉を引用しようと思う事が万一にもあるなら，どうか，それぞれの匿名の著者の名で引用してほしいものだ。」(1) と迄極言しているのである。当時のかなり悪質な諷刺新聞『海賊』（Korsar）からの誘いを断った時に『海賊』は世論の支援という美名を当にして，Kierkegaard を攻撃する口実を見出したのであった。そして事実『海賊』の意図した通り，彼は大衆の嘲笑の的となったのであった。この事件を契機として，彼は「大衆の虚偽」に直面したのであった。だが「大衆」という一種の匿名を借りて，自己の無責任性を棚上げしようとした『海賊』の卑劣な遣り口を，どうして彼自身も踏襲したのであろうか。

『海賊』は大衆の世論という匿名を以て自己の権威を保つ為の手段としたのであるが，Kierkegaard にあってはなによりも執筆者の権威に頼って，第三者である読者が判断を下すという事態を虚偽であると見たのである。つまり匿名という間接伝知の手段をとる事によってのみ，受け取り手である大衆が，各自の主体性に触発された責任ある態度で真理を把握することが可能であると考えたのである。つまり Socrates 的な「真理に騙し込む」という皮肉（irony）に基づく責任ある匿名使用の態度なのである。

だがその伝知したい真理は決して完結した客観的真理であってはならない。Hegel の様に「キリスト教とは何であるか」を教える理論体系ではなくて，「如何にして人はキリスト者になることができるか」という真摯な態度こそ彼が問題にしたものであった。そして匿名を使用することによって Kierkegaard は既に自分が到達し超克し得たあらゆる可能性の一つづつを，一つの極端な典型として描いてみせたのであった。例えば Climacus という匿名が元来，ギリシャの修道僧 Johannes Climacus の著した論文『天国の梯子』（Scala paradisi）に由来するもの(2) であったとすれば，当然その意味するところは梯子の何処かで立ち止まることをせず限りなく登り続けていく態度が次に来るべき段階として要請されているということになる筈である。こうして Kierkegaard は，例えば晩年の大作『死に至る病』（Sygdommen til Dφden）で再び匿名を使っているのである。標題に掲げられた「Anti-Climacus 著 Sφren Kierkegaard 刊行」という執筆者名に彼の複雑な意志が表示されている。之は完全な匿名ではない。然し，この様な半匿名形式を借りたのは，彼自身の言葉によれば「一層高いものがある，それも又匿名による，なぜなら私の個人性がそれに対応しないのだから。この匿名は，キリスト者ではないと言った Climacus とは反対に，Johannes Anti-Climacus と呼ばれる。Anti-Climacus は，異常な迄にキリスト者であるという反対の極端である――ただ私自身は，全く単純なキリスト者（傍点筆者）である様に計う」(3) のであるからに他ならなかった。Lowrie は，この匿名を以て，Kierkegaard がキリスト教の真の姿に人々の注目を引こうとした態度であると見ている。彼自身は後年の著作を実は匿名を伴わぬ実名で書こうとしていたのであり，この Anti-Climacus なる匿名は，彼の偶然の思い付きで，後で取り除こうと思

ったが，最早間に合わなかったというのである。この様な態度すらも再び Lowrie の言葉を借れば「彼は何時キリスト者になったかという特別な瞬間は決して示さなかった，というのは，彼はその生涯の終りに至る迄，単に『キリスト者に成りつつ』あったのだから」(4) という態度が晩年に至って益堅持されてきたからであろう。つまり自らを絶えず「権威なき」者と称し，終局に於ては遂に「キリスト教は最早存在しない」(5) と迄極言し得た程，罪人の意識を持っていた Kierkegaard にしてみれば，人を単独者として神の前に起立することを勧める時，罪の意識の自覚を促す時，端的に言って厳格な意志を表示する文章の場合には，常に署名によらず，匿名によらねばならなかった(6) のである。それは「キリスト者に成りつつある」と自称する事すら，彼にとっては神の前では潜越極まる表現であったからである。

Ⅲ

この章に於て私は更に略一世紀時代を逆行させたい。私の注目したいのは Hawthorne の "The Great Stone Face" に表現された匿名の形式である。Lowrie は Kierkegaard がその家庭に於て受けた清教徒的訓練に注目したが，同様に疑いもなく Hawthorne の作品も清教徒の雰囲気の中で描かれている。又，Kierkegaard の著作に(1)審美的著作(2)倫理的著作(3)宗教的著作という3段階がある事は哲学史の常識であるが，略一世紀を隔てていながら，Hawthorne のこの短篇に略 Kierkegaard の著作と併行した諸段階を発見しうるのは極めて興味深い。Hawthorne によると，高山に抱かれた一つの盆地に母親と一人の男の子 Ernest が住んでいた。目前には人面をした大岩が聳えていて，何時の日かこの大岩とそっくりの相貌を湛えた人がこの世に現れるというのであった。Ernest はこの話を決して忘れず，一日の仕事が終ると毎日この岩を一心に且つ単純に眺めて，余人の与り知り得ない無言の教訓を受けていたのである。

人面の大岩そっくりだとされた人が3名，否正確に言えば4名現れたことがある。最初は成金の Mr. Gathergold であって，地球上の殆んどの富を集めたかと思われる程金持になって，黄金の山を築き故郷に錦を飾って大邸宅を建てる。大衆の世論は彼こそ人面の大岩の再来だと叫ぶが，Ernest にはそうは思えなかった。ただ貧欲な，抜目のない顔としか思えなかった。やがて Mr. Gathergold の財産は蕩尽されていき，彼自身も死去して大衆から忘れられていく。以上は Kierkegaard の著作に移しかえてみるなら，「審美的著作」の段階に相当しよう。

次に登場するのは軍人 Old Blood-and-Thunder であり，之も故郷に錦を飾って帰還し大衆は人面の大岩の再来と絶叫したが，Ernestはその顔貌に鉄石の心を発見したのみで，人面の大岩にある穏和な優しい表情を遂に垣間見ることができなかった。特に血腥いこの軍人を以て大岩の再来と宣言して，大衆の声を指導するかの様に見える牧師 the Rev. Dr. Battleblast の太い声は，軍人と牧師という対称の妙を見せて誠に ironical である。Kierkegaard の場合に即して言えば，彼が死の直前故 Mynster 監督の追悼演説に於て，Martensen が故人を「真理の証人」と称揚した偽善に端を発して，激烈な Martensen 及び Martensen に代表される国教会の攻撃を開始した事実を想起させる。ただ Kierkegaard との違いは，Ernestがthe Rev. Dr. Battleblast を攻撃しなかっただけのことである。

三番目に登場するのは Old Stony Phiz と称せられた，人面の大岩と略同じ匿名を持つ政治家であった。然もこの匿名はこの老政治家自身の意志によってつけられたものではなくて，大衆のつけた綽名であったという事実は意義深い。この場合も勿論，大衆は歓呼の声を挙げて，人面の大岩と Old Stony Phiz は双子の兄弟の様に似ていると絶叫したのであるが，Ernest の目から見ると，この政治家の顔貌の中に何処を探してもあの大岩に認められる精神的な荘厳と同情の表情は認めることはできないのであった。軍人と政治家は，何れも審美的観点からではなくて，倫理的観点から自己の任務を遂行するという点にその本質を見いだす事ができるであろう。従って Kierkegaard に即して言えば，之は(2)の倫理的著作の段階に当ると私は考える。

最後に登場した，人面の大岩に擬せられる人物は一人の詩人 the poet であった。この場合匿名ではなく，さりとて固有名詞でもなく抽象的な意味を湛えた普通名詞にすぎない the poet という言葉が使われているのは注目してよい。この詩人はおそらく作者 Hawthorne その人の傍観者的な立場を表わすものではなかったろうか。この詩人の顔貌こそ人面の大岩にそっくりであると，相変らず英雄崇拝の傾向のある大衆は考えずにはおれなかったし，又之迄の3名の場合と違って Ernest 自身もその詩人の詩を読んだ限りに於ては，大岩の再来に違いないと感じていたのである。それ故にこそ始めて Ernest は詩人と一対一で応待してみたのだが，結果は依然として失望であった。詩人の顔貌と人面の大岩の相貌はやはり似ても似つかぬものであったからである。それは当然の事である，何故なら "But my life, dear Ernest, has not corresponded with my thought."[7] という詩人の弁明通りに，そういう詩人の実存的在り方が彼の顔貌になって表れていたのであったから。既にこの詩人が登場する迄の間に Ernest も少年から中年，壮年期を経て老人の境に達していた。そしてイギリス詩人 W. H. Auden が Kierkegaardを評して，彼 Kierkegaard は詩人でも哲学者でもなく説教者であったと説いた[8] 様に，Ernest も近隣の人々を集めながら，日没後人々が仕事を終えた後で野天の説教を行うのが何時のまにか身についた習慣であった。その説教の際，件の詩人は Ernest の相貌が人面の大岩に生き写しであることを認めて，大衆に訴えたのであった。"Behold! Behold! Ernest is himself the likeness of the Great Stone Face!"[9] この警世の声に促されて之迄と同じ様に大衆は Ernest が正に人面の大岩の再来であることを確認したのだが，やはり之迄と同じ様に Ernest 自身はその様な大衆の声に便乗するにはあまりにも異質の人であった。彼にはその大衆の声など聞こえなかったに相違ない。Waggoner が指摘した様に，「イメージだけにすべてを語らせるべきだと主張した点で，現代小説はイマジストの詩と類似していた。こんな事を Hawthorne は何も知らない。彼にとっては，小説とは，意味を発見する為に人生を探究する手段であった。」[10]のだから「Hawthorne は説明もするし，示しも」[11] したのである。即ち，Hawhorne は曖昧でなく，はっきりと，この時 "Then all the people looked, and saw that what the deep-sighted poet said was true".[12] と言い切っている。然しそれにもかかわらず Ernest 自身は，その事を自覚せず，更に昔時の予言通りに，別な人面の大岩に似ている人が登場することを，堅く心に念じて家路についたのであった。この終局の段階は Kierkegaard の著作に当てはめると，最後の宗教的段階に相当するものと言ってよいであろう。

Ⅳ

終章に於て，今迄の専ら類似点に焦点を絞った感のある議論の展開を再確認すると共に，更に Hawthorne と Kierkegaard の相異点を明かにして，Hawhorne の現代的意義を発見したい。まず，Hawthorne の作品に登場する主人公達の allegorical な名前つまり一種の匿名表現に対して，日本の翻訳者は如何なる訳語を与えているのであろうか。

(13)

	Hawthorne		Mr. Gathergold	Scattercopper
審美的段階	福　原　麟太郎　訳		(「溜金」といった意味の名)	(「銭銭蒔き」の意)
	柏　倉　俊　三　訳		(掻集め屋)	(銅銭撒き)
倫理的段階	Old Blood-and-Thunder		the Rev. Dr. Battleblast	Old Stony Phiz
	(「血雷」という如き意味)		(「戦風」という意味の名)	(「石顔」という意味の名)
	(血と雷)		(戦陣の嵐)	(石の顔)
宗教的段階	the poet		Ernest	the GREAT STONE FACE
	詩　人		(「誠」という如き意味の名)	人面の大岩
	詩　人		アーネスト	人面の大岩

この表ですぐ明白に読みとれるのは，凡ての匿名に対して福原・柏倉両氏とも一応の訳語を与えているが，ただ柏倉訳ではアーネストだけがそのままである。柏倉氏にとっては，この場合だけが例外であるのは，他の Hawthorne 特有の allegorical な匿名とは異った category に属するものと理解されたからであろう。即ち他の登場人物の名称は，凡てその審美的乃至倫理的本質を示す匿名表現であるのに対し，Ernest に限って宗教的実存を示す半匿名であり，Kierkegaard が『死に至る病』で凡ての絶望を分析した時の様に「単純なキリスト者」であることを念じて Johannes Anti-Climacus という匿名を用いたのと軌を一にする。ドイツの優れた Kierkegaard の翻訳者 Emanuel Hirsch によると，Johannes という匿名は「王の生命を救う為に死の沈黙を守り，石と化していく，グリム童話『忠臣ヨハンネス』から取られたものであろう」[14] と推定されている。つまり Johannes は沈黙を守り通すことに於て誠実だったわけであり，之は人面の大岩が出現したと大衆が歓呼の声を挙げる度に決して付和雷同することなく終始沈黙を守り続けた Ernest の姿を彷彿させるものがある。

それは晩年に於て Ernest が老境に達した時，依然として自主的判断を差し控えてただひたすら謙虚な態度で人面の大岩に酷似した人を待ち望んでいた完全な主体性放棄の姿であると解釈してもよい。「主体性こそ真理である」と当初説いた Kierkegaard の態度はやがて「主体性こそ虚偽である」という宗教的著作の主張に質的弁証法の形式を借りて展開されていくのだが，Ernest の場合では実に少年時代から「主体性こそ虚偽である」という態度を貫き続けていたと言ってよい。

又，the poet のみ固有名詞の人名ではなく，さりとて完全な匿名でもなくいわば半ば抽象

的本質を示す匿名表現であり，従って福原・柏倉両氏の訳も共に簡明に「詩人」と片付けられているだけであるが，之は先述した様に傍観者であり従って抽象的存在者でしかありえない作者 Hawthorne の姿を示しているからであろう。

最後に共通点として私が指摘したいのは，Kierkegaard は若い時から神の罰として早く死ぬことを予想し，若い時から既に老人であるという自覚を持っていた。又，Hawthorne が掲げる"The Custom-House" に於ける月光の中でロマンスが生ずるという理論[15] はあまりにも多くの評者に取り上げられて敢て指摘する必要もない程であるが，Kierkegaard 自身も Israel Salomon Levin によると「太陽におじけ，又いつも物かげを行き，丁度トウロル（小鬼）共の様に太陽で輝いた地点に出て行く様になるということはなかった。…彼は常に日当りの側に住んでいたが，然し太陽を閉め出し，そして窓々は内も外も，白いカーテンや模様で閉めたが，それが眼を射る時には鎧戸で閉めた。」[16] という共通の性格を持っていた。Hawthorne と Kierkegaard に共通する直射日光を避けるというこの性癖は，何れも老人の趣味のものであり，孤独の意志の表現である。

然も作品の中で Ernest が人面の大岩の再来を待ち侘びる情景は，しばしば極めて月光とまぎらわしい一日の労働の終った夕方の薄明の中で展開されているのである。之と照応するかの様に，Arlin Turner の説くところに由れば，Ernest のモデルになったのは，作者 Hawthorne が the White Mountains of New Hampshire を旅行していた時に遭遇した一人の老人であった[17] というのである。之が作品の中では少年時代の Ernest から中年・壮年期を経て老人になった Ernest の一代記，いわばミニ教養小説として描かれているが，最高の力点が置かれているのは，やはり一番最後の老境に達して尚人面の大岩に酷似する人物の出現を待ち侘びる老人となった Ernest の姿であろう。夕方の西日に照らされながら，更に詩人から "Behold ! Behold ! Ernest is himself the likeness of the Great Stone Face!"[9] と指摘されながら，尚も静かにだが断固としてその認識を斥ける Ernest の姿であろう。之は死を直前にして「キリスト教は最早存在しない」[5] と迄言いきった Kierkegaard の姿と軌を一にする。ただその態度が Ernest の場合はあまりも平穏に神への信頼を示しているのに対し Kierkegaard の態度はあまりにも激烈に神への信頼を示しすぎているだけである。だが，両者の情緒的態度が異るからといって，両者の辿りつき得た宗教的位相の実存的同一性は決して看過されてはならない。この様な見解は何も私一人の独断ではない。例えば，Waggoner は実存主義が Kierkegaard によって創始されたことを認めながらも，なお時代的に一世紀も溯っている Hawthorne と密切な類縁関係がある事を認めている。彼が「Hawthorne は歯列矯正理論よりも実際の歯痛の方に関心を持っている。…Kierkegaard は，今日，多くの者にとって John Dewey よりももっと身近な存在である様に思える。…何しろ，人生の『本質』についての疑問の余地のない確実性を，我々がとり戻す事は，なさそうに思えるからである。」[18] と説いた時，Dewey がその著 *The Quest for Certainty* に於てとにかく如何に回りくどくはあろうとも，一歩一歩漸進的に真理の確実性に到達しうると述べた optimistic な態度に我慢がならなかったのであろう。Dewey の meliorism では遂に到達しえぬ深淵があることを Waggoner は気付いていたに相違ない。Hawthorne の実存主義的傾向について，Kafka と Kierkegaard を積極的に同一視した Auden[19] と（Auden は特に Hawthorne に言及しているわけではない），又，Hawthorne よりも Kafka の方をより

優れた想像力の非妥協性を駆使した作家であると評価した Lionel Trilling[20] との意見を比較考量して推論するよりも，遙かに Waggoner の指摘そのものの方が，実存主義の先駆者 Kierkegaard と Hawthorne とを直接に比較したという点に於て，急進的であったと私は考える。

それでは Hawthorne は完全に Kierkegaard と同一視しうるであろうか。相違点の指摘の方がまだ重大な作業であろう。まず Kierkegaard の罪の意識を育てるのに重大な役割を荷なった父親の像が Hawthorne にはない。逆に Kierkegaard には母親の像がない。彼は女中上がりの母と，永遠の恋人であると自称した Regine Olsen を共に無視している様に思われる。曾て Kierkegaard は Goethe の恋愛を批判し，Goethe は自己の詩作の為に女性を利用しただけであって，詩人として生きることに真面目であったにしても，恋愛に於ては〈汝〉としての女性に対決することを避けたと非難したが[21] 同じ非難は Kierkegaard 自身にも当てはまるのではなかろうか。どれ程彼自身が「彼女を歴史に属させる」[22] 為に，彼女の為に著作を捧げるべく匿名の表現をしたのだと自称しても，それはあくまでも一つの説明にしかすぎない様に思われる。彼はその著『輪作』（Vexel-Driften）に於て，真の審美家はドン・ファンの様に千三人もの女性を次々に誘惑していくことではなく，たった一人の女性を相手にしてドン・ファン以上に恋愛遊戯にふけりうる者であると述べている。彼の意図が奈辺にあるにせよ，凡ての著作の匿名の理由が恋人 Regine を目標にして書かれているにせよ，事実上次の著作に移る為の踏段として『輪作』も成立しているのである事を認めるなら，Goethe と同じ誤りを犯していることは明かである。

之に比べて Hawthorne の描く Ernest 像には Kierkegaard とは逆に父親の姿こそ始めから欠如している。存在しているのは最初人面の大岩の話をして聞かせる母親の姿だけである。その母親の姿は Ernest が成長するにつれて，掻き消える様に作品の中から退場していく—独断を敢てすればおそらく死去したのであろう。4才で父を亡くして生活に苦闘した Hawthorne と，一生父の罪を我が罪と自覚しながらも，決して自己の生活の糧を自ら額に汗を流して稼ぐことをしなかった Kierkegaard，あくまでも父の財産のみを頼りにして生活を続けた Kierkegaard——。その両者の差は明らかである。"The Great Stone Face" に於ける Hawthorne 自身の立場を表明すると思われる "But my life has not corresponded with my thought."[7] と述べた先述した詩人の反省こそは，むしろそのまま Kierkegaard 自身に浴びせられた批評と言ってもよいのではなかろうか。

そもそも Hawthorne の特徴であり，そしておそらくはしばしば欠点でもあるとされる allegory への愛好癖は，拙論に於ける本題であった "The Great Stone Face" に於ける allegorical な匿名使用と何等かの関係があるのではなかろうか。例えば，Hawthorne は Melville よりも浅薄な作家であるとするのが一つの解釈として，従来試みられてきた嫌いはなかったろうか。この点につき，次に示す René Wellek の指摘は極めて示唆に富むものである。「F. O. Matthiessen が *American Renaissance* で説明した symbol と allegory の区別は Goethe の見解に基づく所が極めて多大であった。allegory は symbol に乏るとされた。従って Hawthorne は Melville よりも劣る作家ということになる。だが Charles Feidelson の著した *Symbolism and American Literature* に於ては現代の symbolism とロマン主義作家の使用した symbol との差は殆んど完全に除去されている。」[23] 例えば Ahab 船長は白鯨

の白さという仮面（つまり一種の匿名）の背後にあるものを敢然として探り当て様とした。この行為には誰でも諒解できる程，あまりにも劇的にすぎる程，深刻な相貌がある。深刻すぎると言ってもよい。ところが Ernest は人面の大岩を遠方から遙か彼方に望見するのみで，絶対者である何者かの symbolic な匿名表現である人面の大岩の背後にあるものを探り当て様としないばかりか，その足下にさえ行こうと試みたことはなかったのである。之等の行為の現象面に現れた側面だけを観察すれば，あまりにも Ahab の行為は雄大にすぎ，Ernest の行為は臆病といってもよい程謙虚にすぎる。だが本当に，何等かの，人間に未知なる偉大なる存在者に単独者として対決し得た者は，果して Melville の方であったろうか，それとも Hawthorne の方であったろうか。少くとも，先に引用した Wellek と同様に Waggoner が「Melville が見ていたものを，Hawthorne はきわめてよく自覚していた。」[24] と理解した時に，Waggoner は Hawthorne の作品の中に Melville に勝るとも劣らぬ，無力さ故の強靱さを，薄明に譬えうる不安絶望を確認し得たが故に，Melville の *The Moby Dick* に於ける最大の symbolical な匿名表現といってよい白鯨の暗黒の白さ the whiteness を上回る暗黒の薄明の黒さを認識し得ていたのであると言ってよい。

従って私は Hawthorne の作品の欠点としばしば見なされがちな allegory 過剰の表現を，一種の匿名の表現と見ることに躊躇しない。従ってそれは硬直した Hawthorne の精神構造を示すものというよりも，むしろ匿名表現を行使することによって神の前に単独者として対決しようとした Kierkegaard 流の絶望の失駆者となった表現形式であると理解する。"Ethan Brand" や "Young Goodman Brown" の如く一見しただけで深刻な人間の内面を描きだした作品を取り上げて，Hawthorne を理解しえたということにはならない。極めて皮相的に見える単純な物語 "The Great Stone Face" も又，その単純さの衣裳故に，Ernest の抱いた平穏な絶望という現代的意義が隠されているという事実を見失ってはならない。Kierkegaard の様に公然と大衆の世論を楯とする『海賊』に反旗を翻えす様なことはしなかったが，しかしやはり Ernest も沈黙の中に常に大衆の判断に反対し続けたのではなかったか。清教徒的雰囲気に育った Kierkegaard[25] は，allegorical な匿名表現を駆使して自己の著作を発表し続けたが，我々の Hawthorne も又 Yvor Winters の説く様に，"the Puritan view of life was allegorical"[26] であったが故に，"In the setting which he chose, allegory was realism, the idea was life itself."[27] と称し得る状況にあったのである。考えてみると，Hawthorne の最大傑作ということになっている *The Scarlet Letter* の場合ですら，Kierkegaard の著作の3段階を当てはめることは，それ程不可能ではない。小説が始った時は既に姦通という(1)の審美的著作の段階は終了している。そして全篇が，登場人物の倫理的責任の鼎の軽重を問われる(2)の倫理的著作の段階にあると言い得よう。そして劇的なカタストロフィーとしてこの作品を締め括る，Dimmesdale の公衆の面前に於ける罪の告白は，紛れもなく(3)の宗教的著作の段階に相当するといってよいであろう。

註

(1) W. ラウリー，大谷長訳『キエルケゴール小伝』（創文社，1958），p. 96——原著は Walter Lowrie, *A Short Life of Kierkegaard* (Princeton Univ. Press, 1942)，大谷氏の訳文による。

(2) 『同掲書』, p. 174.
(3) 『同掲書』, p. 225.
(4) 『同掲書』, p. 129.
(5) 『同掲書』, p. 248.
(6) 『同掲書』, p. 227.
(7) Nathaniel Hawthorne, "The Great Stone Face" in *The Complete Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1959), p. 472.
(8) W. H. Auden, presented, "Presenting Kierkegaard" in *The Living Thoughts of Kierkegaard* (Bloomington & London: Indiana Univ. Press, 1966), p. 3.
(9) Hawthorne,, *op. cit.*, p. 473.
(10) ハイアット・H・ワゴナー, 斉藤光訳「ナサニエル・ホーソーン」, 『アメリカ文学作家シリーズ・第五巻』 (北星堂書店, 1965), pp. 134-35——原著は Hyatt H. Waggoner, *Nathaniel Hawthorne* (Minneapolis: Univ. of Minnesota Pamphlets on American Writers, 1962), 斉藤氏の訳文による。
(11) 『同掲書』, p. 134.
(12) Hawthorne, *op. cit.*, p. 473.
(13) cf. ホーソーン短篇集, 福原麟太郎訳「人面の大岩」, 『七人の風来坊』 (岩波文庫, 1956, pp. 31-62, 及びホーソン, 柏倉俊三訳「人面の大岩」, 『トワイス・トールド・テールズ』 (角川文庫, 1972), pp. 144-71.
(14) 工藤綏夫『キルケゴール』 (清水書院, 1967), p. 175.
(15) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, ed. Roy Harvey Pearce (Ohio State Univ. Press, 1962), p. 35.
(16) ラウリー『前掲書』, p. 283.
(17) Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne—An Introduction and Interpretation* (Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1961), p. 50.
(18) ワゴナー『前掲書』, p. 132.
(19) Auden, *op. cit.*, p. 5.
(20) 「ホーソン文学の再評価」, 『朝日ジャーナル』 1964, No. 39. —原論文は Lionel Trilling, *Partisan Review*, 1964.
(21) 伊藤勝彦『愛の思想史』 (紀伊国屋新書, 1968), p. 159.
(22) ラウリー『前掲書』, p. 152.
(23) René Wellek, "Symbolism in Literal History" in *Discriminations : Further Concepts of Criticism* (New Haven & London: Yale Univ. Press, 1967), p. 101.
(24) ワゴナー『前掲書』, p. 150.
(25) ラウリー『前掲書』, p. 100.
(26) Yvor Winters, "Maule's Curse, or Hawthorne and the Problem of Allegory" in *Hawthorne*, ed. A. N. Kaul (New Jersey : Prentice-Hall, Inc., 1966), p. 12.
(27) *Ibid.*, p. 17.

(補註) なお Kierkegaard の「匿名」は日本語訳では,「仮名」(大谷長・飯島宗享),「偽名」(桝田啓三郎) と種々に訳されているが, 拙稿では凡て「匿名」に統一した。

Summary

Hawthorne's "The Great Stone Face" Reconsidered from Kierkegaard's Point of View

Keijiro UNOKI

Modern critics are inclined to identify Hawthorne's allegorical expressions with his rigid character and his way of living in seclusion. So, to quote René Wellek's phrase, he seems to be "inferior to Melville", because of his inveterate love of allegory. But Wellek doesn't agree with such prevalent opinions, nor Hyatt Waggoner either. Besides, if we take notice of Yvor Winters's remark that the reason why Hawthorne loved allegory was because he lived in the age when "the Puritan view of life was allegorical", and that "in the setting which he chose, allegory was realism, the idea was life itself", it is very natural that Hawthorne's allegorical expressions should be reconsidered from another point of view. The question resolves itself into one of the most important, prsent-day thinkings. What I am going to reason is about the marvellous resemblance between Hawthorne's calm, puritanic way of thinking and Kierkegaard's combative, puritanic way of thinking. If I take a superficial view of things, their modes of thinking and living seem contrary enough, but at the very core I can't help admitting that they are the same. Maybe I had better ask for Waggoner's assitance, because it was Waggoner himself that first compared Hawthorne's thought with Kierkegaard's. But could both Hawthorne and Kierkeggard be defined as 'thinkers' in the true sense of the word ?

As W. H. Auden observed that Kierkegaard was a preacher, so was 'Ernest' in Hawthorne's "The Great Stone Face.", Yes, they were the preachers, who could not be contented with their being mere 'Christians.' They were the Christians sunk in the depth of despair, always looking for the God in the celestial world. Now the reader may well comprehend my intention. The thesis I am gong to deal with is the relation between Kierkegaard's thinkings on almost every book and Hawthorne's thinkings in one short story. Kierkegaard's books are divided into three major categories, almost all of them are written under the shelter of anonymity. For example, 'Johannes Anti-Climacus' is a very artificial anonymity, and it must be remembered that this anonymous expression means 'a very honest one who eagerly wants to be a real Christian'. So what 'Johannes Anti-Climacus' in Kierkegaard's works means and what 'Ernest' means in Hawthorne's "The Great Stone Face" come to the same thing. That is to say ; Mr. Gathergold and Scattercopper might belong to the field of aesthetic anonymity; Old Blood-and-Thunder, the Rev. Dr. Battleblast and Old Stony Phiz to the ethical anonymity; the poet, Ernest

and the Great Stone Face to the religious anonymity.

So I conclude as follows : anonymous expressions in Kierkegaard's works or allegorical expressions in Hawthorne's "The Great Stone Face" have the same existential import. Let me forgive to quote Auden's words in conclusion : "To both the aesthetic and the ethical religion, evil was a lack of relation to God, due in the one case to the God's will, in the other to man's ignorance; to the revealed religion, evil is sin, that is to say, the rebellion of man's will against the relation." Thus we can't be too exaggerative in emphasizing the importance of Hawthorne's allegorical expressions. They were the prophetic and symbolical style of his own.